

ヘーゲルと核戦争

日時：2025年10月18日（土曜日） 14:00-16:00

会場：京都市立芸術大学 C棟3階「講義室7」

当たり前ですが、核戦争について考えるのはあまり楽しくありません。しかし世界は今も現実には核の脅威に晒されているのだから考えるべきだ、などと迫られると、よけい考えたくなくなります。そもそも核の問題を、ある程度正確に理解するのは一苦労です。まず、ベースとなっている原子物理学が難しい。また、核兵器にはいろんな種類があって、それらが戦術的／戦略的（この区別も簡単ではない）にどんな意味を持つのかも、よく分からない。さらに核抑止の最新理論は現代経済学と同じように、数学的／ゲーム理論的に高度に洗練されていて、素人には手が出ません、というか出す気もしない。核の問題は、もしも使われればすべての人が影響を受ける重大問題のはずなのに、ほとんどの人には手の届かないところで議論され、決められているという状況は、考えてみると異常なことです。

核のことを少し頑張って勉強し、自分の意見をSNSで呟いたりすると、すぐさま「軍事オタク」みたいな人が現れて誹謗中傷されたり、炎上したりします。オタクだって瑣末な知識だけで何にも分かっていないくせに、鬱陶しいかぎりです。それで多くの人は、ネットではこういうトピックについて話すのを避けるようになります。ところが、そうやってこの世界にはあたかも戦争も核の脅威もないかのように話していると、今度は「お花畑」とディスられたりする（「お花畑」のどこがいけないのか僕には全然わからないが）。ようするに「黙ってる」ということでしょうか。ネットは本来開かれたコミュニケーションの場であるはずなのに、それとは逆の力が今は支配的になっています。とりわけ、核をめぐる話題に関してはそうですね。

哲学とはいってみれば、こうした発話の押さえ込み競争、議論のマウント合戦から逃れて、言葉を自由にする営みであると言ってもいいでしょう。言葉を自由にする局面は二つあって、一つはよく分からないことでも呟いてみる、と同時に他人が呟いているのも許容することです。西洋古典哲学で言えば、ソクラテス以前のイオニア自然哲学者たちは、「万物は水である」とか何とか、極端でワケの分からないことをひたすら呟いていました。大丈夫か？と心配になるような人たちです。もう一つはプラトンの対話篇のような「おしゃべり」です。ダジャレを言ったり少年愛的なくすぐりを交えながら話がどんどんズレてゆき、脱線に次ぐ脱線——それがまあ、プラトン哲学ですね。いずれも、どちらが正解かを競って相手を打ち負かす論争ゲームではありません。それ以後の哲学も基本的には、そうした「呟き」と「おしゃべり」で出来ています。思考とは言葉を解放すること、それが哲学の原義である「知への愛」であって、この土曜の放課後のテーマで言えば「迷子になること」です。だから、核についても哲学的に考えてみたいと思うのです。

核のない世界の方が安心して生きられる、と普通の私たちはごく素朴に感じます。だから「非核三原則」のようなものが支持されるわけです。けれども現実には、世界中の核兵器が廃棄されることは当面ありません。それは、核を保有している国々が、戦争を回避するためには核兵器を保有することが必要だと考えているからです。大量殺戮を可能にする兵器を持つことが平和を維持するために不可欠だという理屈は、日常感覚からは奇妙に聞こえるでしょう。この理屈が成り立つ根拠は、核が基本的に「使えない兵器」（これまで実戦で使われたのはヒロシマ、ナガサキの2回だけ）であるという認識にあります。使えないなら持つ必要はないというのが常識ですが、核の場合はそれが逆転し、「使えないからこそ持たなければならない」という、まるで『不思議の国のアリス』みたいな奇妙な論理になるのです。

大量破壊兵器がまだ存在しない時代——ザックリ言って第一次世界大戦以前——においては、戦争を外交の究極的手段として理解することができました。もちろん外交といってもその多くは公正・対等な友好関係ではなく、多くは領土や利権の獲得を目的とした口くそでもありませんでした。そうした外交の手段が平和的交渉では行き詰まった時に武力が行使され、それが戦争になりました。しかし戦争はあくまで外交の手段なので、目的が達成されたら終らせる必要もありました。とはいえ戦争は始めるのは簡単だが一旦始まると暴走

するので、戦争をいかにして終わらせるかが、君主や政治家の才覚が最も要求される点でした。こうした時代の戦争を理論化したのが、プロイセンの軍人クラウゼヴィッツ（Carl Philipp Gottlieb von Clausewitz, 1780-1831）の書いた『戦争論』（*Vom Kriege*, 1832）です。この人はヘーゲルより10歳年下で、この『戦争論』は戦争について考える時に、古典的価値を持っています。今でも防衛大学では教えられていると思います。しかし第一次世界大戦の頃には、クラウゼヴィッツの戦争論はもう古い、という意識も生まれてきました。20世紀以降の新しい戦争論として代表的なのは、やはりドイツの軍人であるルーデンドルフ（Erich Friedrich Wilhelm Ludendorff, 1865-1937）の『総力戦』（*Der Totale Krieg*, 1935）です。戦争は政治（外交）の手段ではなく、逆に政治も社会も文化もすべて戦争の手段である、という考え方です。極端に聞こえますが、20世紀以降の世界状況を鋭く表していることは否定できません。

外交手段としての古典的戦争の最小のモデルは、個人間の決闘です。ライバル同士が、話し合いではどうしても決着がつかない——侮辱を受けたのに相手が謝らない、同じ女性の愛を競っている、等々——ような時、決闘が行われます。決闘はたんなる殺し合いではなく、そこにはルールがあります。剣による昔の決闘は力量の差が大きいです、ピストルによる近代の決闘はそれより公正なものと考えられました。決闘が公正なのは、その勝敗を決めるのが神（神は正義ある方を救うはず）だからです。そして決闘したからといって、必ずしもどちらかが死ぬというわけでもありません。決闘を可能にしていた条件は、昔のピストルの命中率が低かったからだとも言えます。現代では、話し合いが決裂したからといって決闘に訴える人は少ないでしょうね。その理由は、神への信仰が失われたからだけではなく、武器の精度が上がったからです。現代的な武器で決闘したら、高い確率でどちらかが、あるいは二人とも死ぬことになるでしょう。

決闘という古典的モデルを使って、核戦争について考えてみることもできます。敵対する二人の人物が、確実に相手を殺せる拳銃を持っているとします。しかもその拳銃には、打たれたら自動的に報復する機能も付いています。すると、二人が理性的に（つまり自分の延命を目的として）判断する限り、どちらも拳銃を発射することはできません。これが抑止力です。この場合抑止力は「相手は絶対に攻撃しない」という信頼によって可能になっているというよりも、「もしかしたら攻撃するかもしれない」という疑念によって担保されています。抑止力が有効になるのは、互いの攻撃力が均衡している時です。均衡することが重要なことから、軍備の均衡レベルを下げた方が、互いにコストは低くなります。ここに軍縮の可能性が出てきますが、相手がズルをして自分だけ軍拡するかもしれないので、軍縮は互いに査察するという条件とセットになります。

核兵器以前の軍備競争においても、「勢力均衡」によって戦争を回避するという考え方がありました。歴史的に最も重要なのは、フランス革命とナポレオン戦争終了後のウィーン会議（1814-1815）です。ここで、主権国家間では互いに攻撃力を持つことが平和を維持することとなるという、現代的な国際政治の形がはっきりしました。古代や中世においては多くの場合、強大な帝国（ペルシア、アレクサンダー、ローマ、モンゴル、中華、オスマン、等々）による圧倒的支配によって平和が維持されていました。言ってみれば『ドラえもん』の世界のジャイアンのような、圧倒的に強いガキ大将、「番長」的な存在によって子供たちの世界の秩序が保たれているような状態（ジャイアンに従ってさえいれば弱者同士はケンカしなくて済む、ただドラえもんは本当は強いけど、未来から来たロボットなのでのび太を助ける以外は干渉しない）です。しかしウィーン会議以降の近代になると、19世紀のイギリス、20世紀のアメリカ等の覇権国は存在していましたが、同時に強国間の軍事的均衡が外交の不可欠な課題となりました。

ヘーゲルが『精神現象学』を書いたのはそのナポレオン戦争真っ最中の1807年です。その前年、ナポレオンはヘーゲルが執筆していたイェナに侵攻しました。ヘーゲルはナポレオンのことを「馬上の絶対精神」と呼びました。それは事実なのですが、ヘーゲルは別にナポレオンという一個人のことを崇拝していたわけではありません。つい口が滑ったのかもしれません。それはともかく『精神現象学』というのは、本当にとんでもない本だと思います（現代の大学でこんなものを博士論文審査に提出しても、絶対に受け付けてくれません）。いったい何について書かれているのか、それがまず分かりません。分からないが、変化、運動について書かれているらしいことは確かなようです。それも決まった法則に従った物理的な変化や運動ではな

く、それまでなかったものが発生し成長していくという、生命のダイナミックな変化・運動です。しかしそれを記述しているボキャブラリーは自然科学的ではなく、感覚、意識、矛盾、真理、否定、精神といった哲学的な抽象概念です。意識が否定の経験を通じてしだいに現実的なものとして発展してゆき、ついには「絶対精神」に到達するというプロセスが記述されています。

いったい何のことを言っているのか、個人の成長を語っているようでもあり、キリスト教的な世界観のアップデートのようでもあり、また世界史の運動を記しているようでもあります。何を言っているのかは分からないのだが、とてつもない思考のエネルギーによって駆動されていることは感じられます。だから、分からないのに読んでしまう本なのですが、今は哲学書でもそんな本は少ないので、いったいどこから手をつけていいのかわからないと思います。アドルノはどこかでヘーゲルの哲学について、「火のように熱い酒に満たされているが、どこに飲み口があるのかわからない樽だ」みたいなことを言っていました。そこでここでは、無理やり飲み口を付けてみようと思います。それは「終わり」という主題です。とっかかりとしてヘーゲルの思想においては、個人の生であれ、世界や宇宙であれ、その発展には必ず「終わり」があるという点に注目します。つまり「歴史」も終わるのです（ヘーゲルは「美学」の講義もしましたが、そこでは「芸術も終わる」と言いました）。

といっても「歴史の終わり」とは、人類が滅亡するという意味ではありません。このことを理解するには、ヘーゲルの「歴史」が、私たちが今「歴史」という言葉で理解しているものとはまったく異なることを知る必要があります。「歴史」というと私たちは、過去の資料を調べてできるだけ客観的な事実を見出し、さまざまな出来事を因果関係で説明するようなことだと考えます。「歴史問題」というのがしばしば政治的な文脈でも問題化されますが、それはようするに「事実」をめぐる争いです（「慰安婦」は本当にいたのか、等々）。しかし事実を証明する資料は多くの場合不完全であり、信頼性も解釈も様々なので、なかなか決着が付きません。また事実としての歴史には「終わり」も「目的」もありません。もし「終わり」があるとなれば、それこそ核戦争で人類が滅亡した時ということになるでしょう。

それに対して歴史には、客観的事実の再構成という側面だけではなく、「物語」としての側面があります。物語とは、主人公の誕生、成長、戦いや危機の克服、自己否定や自己変容を通じて、最後には自分は何者だったのかという自覚へと到達するものです。物語は本質的に「終わり」「目的」と切り離すことはできません（もちろん現代文学のようなものはそうした物語を否定することもあります。それは物語をあえて拒絶するというところから意味を汲み出しており、やはり物語を必要としていると言えます）。歴史はそうした「物語」としての側面を持つからこそ、個人や国家、民族のアイデンティティを支える力があるのです。そこから考えると、いわゆる「歴史問題」が解決不可能なのは、そこで求められているのが本当は「物語」としての歴史であるのに、それを解決するために「事実」としての歴史に訴えようとしているからです。

ヘーゲルの「歴史」も事実の連鎖ではなく一種の「物語」です。それは、主人公である「私（自己）＝意識」が、外界や他者と関わりながら成長してゆくプロセスを記述します。そのプロセスが「弁証法」ですが、これはどういうことかを簡単に説明してみたいと思います。たとえば「私」は、自分自身が承認されることを求める。現代よく話題にされる「承認欲求」というやつです。それを満たすために、自分はこんなに頭がいい、他のやつらはみんなバカだと主張しても、誰も認めてくれません。当たり前ですね。ではどうすればいいかというと、自分よりもまず他人の存在を承認することです。ある意味では、単純に欲求している自分を否定して、他人の欲求を肯定することです。そのことによって自分も承認を得られます。他人の投稿に「いいね」すれば自分も「いいね」してもらえる、というのはあまりに卑近すぎる例ですが、まあそういうことかもしれません。もうちょっとマシ？な例で言えば、子供が親や先生から認められるには、自分の欲求の幼児的な形を否定し、彼らが自分に求めていることを肯定して、それによって単なる服従・依存的関係から人格的な関係へと成長するということです。「止揚」という不思議な日本語で翻訳されてきた「アウフヘーベン（aufheben）」というドイツ語のヘーゲル的な意味は「否定すると同時に保持する」ということです。

このことが、個人の成長と同時に人類そのものの成長としても語られます。これがヘーゲルの世界史です。古代の専制国家は、いわばまるで幼児のような存在です。支配者は、自分はこの世界でもっとも価値の

ある存在で、何でも許されている存在なのです。けれども言うまでもなく、専制国家の王の権力は、本当は農民や奴隷の労働力によって支えられています。王の存在を可能にしているのは奴隷なのです。しかも王は、自分は何もしなくても安楽な生活が手に入るから、現実的世界とのつながりがだんだん希薄になり弱くなってゆくのにに対して、奴隷は過酷な労働の中で常に現実世界に触れ合っていますから強いのです。こうした矛盾が蓄積していったら、やがて専制国家は崩壊します。現代日本でも、権力者が自分の周りとはばかり付き合っていて現実の問題を知らないという状態になると、支持を失って権力そのものが崩壊します。

そうして古代的専制が崩壊すると今度はギリシアの民主制が来ます。しかしこれも最終地点ではなく、民主制は次第にデマゴグが横行して、人々を誘導し人気を得たものが権力を握る、いわゆる衆愚政治へと墮落していきます。これも、マスメディアが世論誘導して好き勝手をしている現在と似ています。ギリシア・ローマの後、キリスト教が来ます。ここからが広い意味での近代です。（正統的な）キリスト教のポイントは、本来この世界に形をとって現れないはずの超越者（神）が、人間の姿（イエス）として現れるという、途方もない着想にあります。ちょっと長くなってこのペースでは核戦争まで辿り着けないのでこのあたりは省略しますが、近代的な国家が変遷を経て絶対王政に至り、それを市民革命で打倒しましたが、その革命もまた混乱と恐怖政治を生み出し、それを收拾して新たな指導者として国民の支持を得たのがナポレオンです。これがヘーゲルにとっての「歴史の終わり」です。だから「絶対精神」と呼んだわけです。

けれども21世紀の私たちから見ると、その後も歴史は200年ちゃんと進行しているのではないかと、どこが「終わり」なんだ？と思うでしょう。ヘーゲルにおける「終わり」とは時間的な終わりではなくて、物語の終わりなのです。つまり対立した力が闘争を繰り返しながら、新たな段階へと発展してゆく、その発展の論理的可能性が、行き着くところまで行ったということです。弁証法的な運動が停止する到達点にきたとも言えます。だからそのあとはなにが起ころうと、それは本質においては、同じことの繰り返しなのです。実際、革命は何度も反復されました。「歴史の終わり」は、社会主義革命、二度の世界大戦、ソ連の崩壊と冷戦終結という形で、何度も繰り返されてきたと考えることもできます。

核兵器はそうした「歴史の終わり」を、物質的なレベルで否応なく体現する存在として、理解することができます。だからヘーゲルは核弾頭を搭載したICBMを見たとしてもあまり驚くことはなく、ああ、ついにここまで来たかと言うと思います。核兵器は実際、「最終兵器」とも呼ばれます。最終兵器とは、人類を滅亡させる（かもしれない）兵器であると同時に、歴史を終わらせる兵器という意味です。ヒロシマ、ナガサキのショックが世界に広がり、アメリカの理論家たちは、軍事はもはやこれまでの考え方では不可能だと気がつきました。各戦略の基礎を築いた重要な人物が、終戦直後の1946年に『絶対兵器——原子力と世界秩序（The Absolute Weapon: Atomic Power and World Order）』という本を書いたバーナード・プロディー

（Bernard Brodie, 1910-1978）です。この人は別に哲学的な背景のある人ではありませんが、ジークムント・フロイトの精神分析学を知っており、スタンリー・キューブリックの映画『博士の異常な愛情』にも影響を与えました。

その後主としてアメリカで発展してきた核戦略理論は、表層的にはゲーム理論などの数理的な問題解決モデルを発展させる方向で進んできました。非常に専門的で、意思決定の立場にいる政治家や、実際に核ミサイルのボタンの前に座っている軍人が理解できるとは、とても思えません。僕自身もよく分かりません。今なら生成AIが、もっと説得的な戦略を提示できるのかもしれませんが。しかし基本的に核抑止理論は、プレイヤーが合理的判断をするという前提に立っている点で、人間本性の一部である狂気やタナトス（自己破壊衝動）を無視しています。その点で人間を、自己利益を最大化するために合理的行動をする主体（「経済人」）とみなす古典派経済学と似ています。両方とも、現実を一種のゲームに置き換えることで、際限のない論理的精緻化が可能になっているだけなのです。しかしそれらは全部ちゃぶ台の上で行われているので、ゲームに参加しない星一徹みたいな人がいきなりちゃぶ台返しをしたら、ひとたまりもありません。この、「ちゃぶ台返し」をも思考するためには、お利口で安全な現代哲学ではなく、怖いけどヘーゲルに聞かないとうとうにもならないのではないかと僕は感じています。